

厳復の生きた時代と富国への熱望

赤間 道夫

徳川幕府からオランダに派遣され、ライデン大学フィッセルング教授から経済学の手ほどきを受けたふたりの日本人留学生がいた。その頃すでに神田孝平や福沢諭吉などによっても西欧経済学の紹介がおこなわれつつあったとはいえ、直接的な勉学を志した嚆矢とされ、『蘭学事始』になぞらえて「経済学事始」(木村毅「経済学事始——文久二年遣蘭留學生記事」一九三〇年初出、『明治天皇と後治世下の人々』一九四二年所収)と呼ばれたことがある。そのふたりとは西周と津田真一郎である。帰国後の西は哲学、津田は法律学を重点に講義や雑誌論文で近代化を目指すのが国にフィッセルング直伝の経済学を伝えるという役割を担った。経済学にとどまることなく包括的な啓蒙家であり、彼らを「日本百科全書派」と称

したこともある(麻生義輝『近世日本哲学史』一九四二年)。「自由主義と社会主義」と保守的国家主義との同時存在と、この三者相互間の特異な関係」(杉原四郎『日本の経済思想家たち』日本経済評論社)のもとで、わが国が最初に接した西欧経済学は古典派経済学(アダム・スミスやダーヴィッド・リカードウ)そのものではなく(彼らのブルジョア・デモクラシー精神を継承した個人主義・自由主義基調の経済学であった。経済学史では古典学派解體期の経済学と言われる経済学である。このことは、やや遅れて本格的に翻訳が現れるスミスの『国富論』やJ・S・ミルの『経済学原理』に先立って、古典派の思想や理論が「近代」日本の経済システム形成や経済政策に応用すべく解説書や入門書の形をとって紹介・導入され

永田圭介著

厳復

富国強兵に挑んだ清末思想家



四六判 360頁
東方書店 [2100円]

たことを意味している。それとともに、最初期に導入された西欧経済学は、J・S・ミルやルソーやスペンサーらから近代的な個人の自由と平等の主張をかぎりつつ、古典学派や解體期経済学の歴史的限界を意識することなく経済学一般あるいは最新最良の経済学として受容されることにもなった。自由民権運動の中心地のひとつだった福島県石川町では明治初期にすでにモンテスキュ『法精理』、ルソー『民約論』、J・S・ミル『自由之理』、同『理学』、同『代議政体論』、スペンサー『社会平等論』、同『権利提綱』、ペリー『理財原論』、フォーセット夫人『宝氏経済学』のほか『英国文明史』、『仏国革命史』などを学習用テキストとして使

中国語 結果構文の研究

—動詞連続構造の観点から

石村 広 著

「動詞+結果補語」構造を、動詞連続構造とヴォイス体系の角度から検討。従来の理論分析に新視点を提示。 A5判 ■5800円

中国語の程度表現の 体系的な研究

時衛国 著

現代中国語の多様な程度表現の実態を、綿密な例文分析と、体系的な観点から程度副詞を中心に追究する。A5判 ■2520円

ことばの散歩道Ⅲ

—日中故事ことわざ雑記

上野 恵司 著

范蠡から魯迅・毛沢東まで酷愛読書60年の著者による「ことばの楽しみ方」と日中言語文化エッセイ全76話。四六判 ■1680円

中国語 40字で伝える日本

シャドーイング用CD-ROM付

芳沢ひろ子・秦燕 著

流しそうめんとは？忍者とは？日本のもの・こと334項目を美しくこなれた「伝わる」話し言葉で表現。 A5判 ■2310円

白帝社

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

用したことが知られている。だが、新しい市民社会形成のための理論的武器として古典派経済学を含む西欧ブルジョア・デモクラシーは、天皇制国家としての明治国家体制の強化によって、国民の経済学・思想として実現することはなかった。その後わが国では英仏系自由主義経済学にかわって独逸系歴史学派経済学に移入の重点が変わっていき、国家学や社会有機体説、ナショナリズムが声高に唱えられるようになる。

日本の西欧思想の導入は、西欧→日本というルートもさることながら明治維新前後は中国語訳を通じてもたらされている。清末中国にいた宣教師が西欧書物の中国語訳を出版し、それらが日本にもたらされた。フォーセット『経済学提要』はマーチンの中国語訳をもとに岸田吟香が訓点を付して『富国策』として出版したものである（明治一四年）。本書の評の前に長々と記したのはほかも暗雲が立ちこめる清末にあつて、国を思い、民度の充実を願いつつ西欧思想の翻訳を手がかりに、富国の将来を展望していたからである。日本と中国に同様の問題意識をもって西欧思想を範にしつつ自国の将来を真剣に考えた先人たちの格闘は評者の知的関心を鼓舞してやまない。本書は、清末の思想家、啓蒙思想家として知られる嚴復（一八五四・一・八一—一九二一・一〇・二七）の評伝である。日本に亡

命経験がある梁啓超や孫文、日本に留学経験がある秋瑾や魯迅たちにくらべれば知名度は低いものの、中国近代史に関心がある人にとっては馴染みのある人物である。すでにわれわれの前には區建英著『自由と国民 嚴復の模索』（東京大学出版会、二〇〇九年）がある。この大著が嚴復の思想を体系的に読み取り、思想の中軸を確認し、国民国家未完成の問題意識を發展させようとした論考であるとすえて、彼の生きた時代と富国への熱望の一生を描いた著作といえるだろう。嚴復の生涯を描くことで、翻訳家・嚴復が相対化され、思想家・嚴復が浮き彫りにされている。本書では翻訳家・嚴復につい

ては「翻訳活動」として一章を割いているにすぎず、「少年時代の環境」、「福州船政学堂時代」、「実習航海と台湾従軍」、「英国留学時代」、「北洋水師学堂時代」、「甲午戦役（日清戦争）」、「変法維新運動」、「翻訳活動」、「生々流転」と時系列で展開する叙述全九章の一章である。

嚴復は、ハックスリーの著書「進化和倫理」を「天演論」と翻案したほか、ミススの「国富論」を「原富」、J・S・ミルの「自由論」を「群己権界論」、モンテスキューの「法の精神」を「法意」、ジェンクスの「政治通史」を「社会通詮」、ジェヴォンズの「論理学入門」を「名学浅説」、J・S・ミルの「論理学体系」を「穆勒名学」として翻訳・出版した。ハックスリー、ジェンクス、ジェヴォンズの翻訳はそれぞれスペンサー、モンテスキュー、J・S・ミルの要約者としての役割を負っていた。これらの翻訳は帝国列強の圧力下で清の富国への発展をはかるという嚴復の強い目的志向が働いていた。評者にとってはスマイスの「国富論」やJ・S・ミル「自由論」の翻訳者とし

ての嚴復についての知識はあった。日本と中国は西欧思想の導入についてはそれぞれ經由地の役割を担った時期があった。中国を介して、あるいは日本を介して吸収したとすれば、同じ漢字圏として術語の使用に大きな影響を与え、受けたのだ。嚴復はたんに西欧文献の翻訳家ではない。むしろ翻訳家の使命を確信的に逸脱して批判と自己解釈を加え「翻案」すらしている。さらに、日本ではかの「解体新書」以来西欧語に対応する術語がない場合造語して翻訳語を造った。本書でも「嚴復も翻訳以前の課題として、翻訳用語の造語作業をする必要があった」（二一九ページ）と指摘している。造語と日中間の相互交流はますますこしく時代を下って、陳独秀、魯迅、胡適、李大釗らの新思想研究と啓蒙の時期と交錯するなかで現実のものとなっていく。

嚴復は維新変法を叫んだ時期もあれば、辛亥革命までは清末文化を代表する知識人であったこともある。孫文と袁世凱との政治的駆け引きのなかで嚴復は北京大学初代学長をとつとめ、袁世凱「帝政」

中国発行の日本語月刊総合誌

人民中国

People's China 1月号

人民中国雑誌社 定価400円(税込)
[年間購読料4800円(税込)]

【特集・「クリエイティブ」が北京を照らす】デザインが生活を変えた
◆典型的な集積地を拝見【中日国交正常化40周年特別企画】中国人から見た日本の「地方」の魅力①かながわ

【連載】ぶらり旅 ハルビン③氷雪とグルメリー 嚴冬の魅力◆チャイナ・パワーを読み解く Part II ③ EU債務危機と龍年の中国◆私のしごと④生徒の成長を糧に粘り強く・聴覚障害者学校の教師◆世界遺産めぐり⑥浙江省杭州市・西湖を彩る文化的な景観①大詩人が築いた二つの堤◆ほか

「人民中国」は中国で編集・発行される日本語雑誌です。政治、社会、考古、歴史、美術など幅広い分野の情報を満載。見本誌贈呈。
☎03(39937)0300(東方書店)
2010年1月号より「人民中国」デジタル版を「iBook」で販売しています。サンプル版の試し読み(無料)もできます。

<http://www.fujisan.co.jp/magazine/1385>

推進の役回りを期待されたりもした。やがて、厳復は『莊子』に傾倒する。西欧的市民の不在を強く感じていた厳復は、良き為政者による上からの「革命」に大きな希望を託すことになる。啓蒙思想家・厳復の生涯と厳復の世俗的性格がよく描かれている。著者の丹念な追跡によってある時は時代の先を読み、ある時は時代に翻弄される等身大の厳復が読者の前に現れている。厳復は、ハックスリーの「翻案」にみられるように、「清末の惨禍の中に生きる中国人民を、どのように「富強」に適する体質に訓育し統治するかという、トップダウン（上意下達）的目的志向」（一九三ページ）を持っていた。厳復を突き動かした動機は、中国人民への啓蒙というこの一点にあった。厳復が最終的に中国的なるものに帰依したのは、中国と中国人民への絶望と希望とを複雑に絡ませたからにちがいない。

日本では明治一四年までに中国経由の西洋経済学導入は見られなくなる。韓国では西欧経済学導入は主として日本への留学生によって導入された。同じ韓国で

は二〇世紀の境目前後までみると、中国の『申報』や『万国公報』を経て、フォセットの公債論、マルサスの人口論、ジェヴォンズの貨幣論が導入されている（李基俊『西欧経済思想と韓国近代化』）。厳復が活躍していた時代およびそれ以降、日本・中国・韓国を結んだ知的トライアングルが着実に形成されていたのだ。とりわけ日中両国において一九二〇年前後からのマルクス主義思想の受容は両国の相互交流の解明なくしてありえないことがわかってきた。アジアと西欧という視点だけでなく、日中韓の西欧思想・経済学の導入と三国における近代化との関係はこれまでにない研究課題である。日本における西欧思想・経済学受容史研究は文献目録を含め比較思想的考察の蓄積がある。後進諸国が古典派経済学を受容するときに示した「概念的な深さと非現実性」（出口勇蔵編『経済学史』一九五三年）

が日中韓で共通なのか。西欧文献の翻訳史を細く段階では表面的理解にとどまらざるをえなかった。梁啓超、厳復や魯迅、胡適、李大釗らへの個別の詳細が明らか

になりつつ現段階ではこれまでにない新しい知見を提供してくれるはずである。本書が明らかにした厳復の清末における富国強兵論という肉太の輪郭は、東アジアにおける西欧思想伝搬および受容研究の新しい可能性を提示した。福州郎官巷にあった厳復の自宅は現在福州厳復故居記念館になっており、故居近くの福建省博物館には厳復の展示コーナーが設けられているという。「文恵先生」（門人熊純如による厳復の諡号）ゆかりの地を訪れてみたいものだ。

（あかま・みちお 愛媛大学）

